

最後の晩さん

(マタイ二六章一七〜三五節)

鬼 沢 力 男

イエスの受難を前にして、二つの全く相反する場面が展開された。一つは一人の女によるイエスへの限らない愛と信頼、一つはユダに表されたイエスへの不信、あまりにも明暗を分ける出来事でありました。イエスご自身はいつも変らぬ神様への信仰と人間への無限の愛をもつて同じ所に立つておられるのに、イエスに対する人間の心の持ち方一つによって、全く相反する場面が生まれたのであります。

一七節から二九節までは「最後の晩餐」の記事になっています。

除酵祭が始まりました。この日に過越しの羊をほおつて食事の用意をし、その夜過越しの食事が行われるわけで、この食事の用意をどこするのか弟子達はたずねました。前もつて打合せがあつたのでしょうか、「かねて話してある人の所」とイエスはいつています。ルカによれば「水がめを持っている男が…」となつており、イエスは弟子達に明らかにしておらず、自分達が敵にかこまれて今、敵に気づかれずに弟子達と最後の食事を守りたい

という配慮が考えられます。この家の主人は一八節に「先生が」(デダスカロス)とありますから、イエスの弟子であることが明らかです。

「わたしの時が近づいた」主イエスの十字架の時が近づいていることをイエスご自身ははつきりと知られました。過越しの用意が整おうとしている、それはまた同時に神の小羊がほうられる用意も着々と整えられることでもありました。

ユダの身にはすでにサタンが入っている。イエスは食事をしていゝる時いわれた。「あなた達のうちの一人がわたしを敵に売ろうとしている。」イエスは卒直に事の真実を告げられた。聖書現行訳では裏切ろうとしているという表現になっていますが、原文によれば塚本訳のようにパラドーセイとなつており、パラデドーミ(敵に)渡す、売るといふ表現をしています。十字架の贖いにつく者と、これを離れる者の行為が売るといふ表現であることの一八〇度の相違をかみしめさせられる思いがいたします。

同じ食卓にいる一人がイエスを敵に引き渡そうとしているとは弟子達は全く気づかない。思いがけぬイエスの言葉にびっくりしたことでしょう。おどろぎと不安にかられたでしょう。そうした意味で現行訳の「主よ、まさかわたしではないでしょう。」といふ表現は状況として良くわかるような気がします。

しかし、今まで主イエスの近くに愛の交わりをもっていた弟子達が、どうしてこのような言葉を発しなればならなかったの

か、あまりにも思いがけぬ言葉のためか、あるいは大きな権力の敵を前にして心のどこかにイエスをはなれることがあるかも知れないと漠として感じていたためでしょうか、大いなる緊張が弟子達をおそった事でしょう。

二三節「イエスは答えられた、わたしと一しよに同じ鉢から食べている者、それがわたしを売る」と。この言葉は詩編四一・九に「わたしの信頼した親しい友、わたしのパンを食べた親しい友さえもわたしにそむいてくびすをあげた」とあり、耐えがたい苦痛に満ちた言葉でありました。 わざわいなるかな、ユダであります。

イエスはすでにご自身の歩むべき道をはつきりと見通しされていたでありましょう。キリストの苦難と死は聖書に予言された神の永遠のみ旨なのである。(イザヤ五三章) 神のみ旨によってキリストが死なれるとしても、うらざり者の罪がなくなるわけではなく、どこまでも、罪に汚れたままにある。二四後半の「しかし」あるいは「だが」と訳された言葉の重みは、神のみ旨によるイエスの死と、イエス・キリストをうらざる人間のわざの二つの行為が同じく対置される程の重みを持つて私達に迫ってくるようです。

ヨハネはこの食事におけるイエスの行動や実際の状況を描写している。(ヨハネ一三・四) イエスは弟子達の足を洗い始められた。食事の席につく時客の足を洗うのはしもべの仕事である。師として仰いでいるイエスの行動にペテロはおどろく。イエスは弟

子達を愛する故に自分がそのしもべとなって仕えることを示されたわけです。 この行為の中に、あるいは この最後の愛のわざによつて、ユダの心を神に立ち返らせることができないうであろうか、ユダの決意はサタンによるものであるが、この時でもなお全能の神にはできないことはないのだから」とみておられる先生もおります。しかし、ユダの心はついに変らなかつた。ユダの行為によりイエスの運命は決まりました。これは聖書に予言されたメシアの運命である。イエスは神によつて定められた十字架への道を進まれます。

ユダは本当に生まれなければ良かったではありません。

さて、ユダは出て行きました。不信の者は去り、信ずる者が残った。時は迫りました。イエスはご自身にかかわる神の真理の奥義について、パンをさき、杯を飲むという行動とともに語られました。パンをさきに取つて食べなさい、これはわたしの体である。イエスの存在そのものが弟子達全てに分け与えられる神から給わるいのちのパンでありました。このいのちのパンについてヨハネ福音書が詳細に述べておりますので六・三二―五一をもつてその意義にかえたいと思います。(二六節)

また杯をとり感謝して彼らに与えていわれた。これは多くの人の罪を赦されるために流すわたしの約束の血である。(二七―二八節) 分け与えられた杯はイエスのいのちの血を意味する。モーゼの契約の血は犠牲の動物の血でありましたが、今イエスは罪の

ゆるしのために自分の血を注ごうとされています。イエスのからだ血、それはイエスの全生命であります。今それを人間のあがないのために、ことごとく与えつくされようとしている。

そして、この事実を示すものがイエスの十字架でありました。人はただ、このことを信じ、その全部をうけることによって罪のゆるしを与えられ神の国の救いにあずかることができる。私達は内にかえりみて何らの良き所はない、まして、私達に示されたイエス・キリストの前にあつて一片の義すらおぼえ得ましようか。まことの光に輝され私達は消え入るばかりであります。

しかし、打ち砕かれいさおし無き心の者の耳に、無限の愛に満ちた主のみ言葉が聞えます。幼な児の如くにそのみ声に手をのべるのであります。

ヨハネの六・五三―五八はイエスのこの間の言葉をよくあらわしています。

神の国で新しく飲むその日までといわれるようにイエスにとってこの食事はこの世における最後のものとなりました。イエスには予言にある十字架の死があるだけになりました。

三〇―三五節はペテロのつまづきの予言であります。

来るべき神の国の救いは疑われないにしてもその前にイエスが殺される。足のなえた者や目しいをいやし、数々の力あるわざを示されたイエス、そして主と仰ぐ師がどうして殺されるのか。偉大な主を身近に接すれば接するほど弟子達には納得のいかないこと

であつたかも知れません。ペテロは「みんなの者がつまづいても…」だれよりも強くつまづかぬ自信を持っていました。(三三三節)しかし、後の記事にあるようにイエスを否定してしまふペテロでありました。人間の自信がいかにしろいものであるか思い知らされる場面であります。しかし、それだけの事ではない。ペテロをはじめとする弟子達、多くの人々の思いを越えて、それ以上にキリストの十字架が大きいということであろうと思います。

更に神の側から見れば、こうした人間的自信というようものはあまり価値がない。重大なのは信仰の態度である。神の愛、思恵をどううけとめるかであります。ペテロは神の側から見てつまづく必要があつた。人間的な自信や思いが打ち砕かれてはじめてペテロは真に強くされていったのだらうと思います。

パウロの場合も状況は同じであつたのです。人は神の義によつて裁かれねばならない。しかし、それと同時に神は大いなる救いの道もそなえられる。良き羊かいは羊の先頭に立つてその群を導びく、散らされることの中に大いなる悲しみがあるが、主イエスが先立つて行かれることの中に群は再び集められ望みと喜びに歩みつづけることができます。

イエスの時は縮まりつつあります。苦難のしもべの予言そのままに、イエスは父なる神を仰ぎ杯をとりのぞけようとされない。

彼らはさんび歌をうたいオリブ山へ出かけて行つたのでした

(三〇―三五節)

先頃テレビで「クラークの系図」という番組があり、内村鑑三のことについて述べておりました。そのなかに、彼内村について「神の前に立つ独立した一人の人間の姿」という表現がありました。神の前に立つ存在―私はイエスの地上における歩み、そして内村の歩みの信仰という一本の糸のつながりを強く感じさせられたのであります。

イエスの受難研究(三)

「ゲツセマネの祈り」とその周辺

宇野輝

(一) ゴルゴタに通じる通

福音書は屢々歴史の実証しうる範囲を超える真実を語る。福音書は聖霊によるイエス・キリストへの信仰証言である。福音書中、恐らく全聖書中でも最も畏怖すべき厳粛な場面である「ゲツセマネの祈り」はこのことを物語る。ゲツセマネの場面には客観的な目撃者はいないのである。この園を覆う闇の中で、一体誰がイエス様の祈りの言葉を聞き誰がその行動を見守ったか。弟子達に対するイエス様の深い要請にも関らず、悲哀と御憐みの唇から漏れた言葉は「あなた達、そんなに、たった一時間もわたしと一緒に目を覚ましておられないのか。目を覚まして、誘惑に陥らないように祈っていないさい。心ははやって、体は弱いのかから」(塚本先生訳) (心||霊とも訳し得)。祈りの戦場で一度なら

ず、二度、三度不覚にも眠りこけてしまった弟子達。そして目撃者のない記録。

にも関らずゲツセマネの祈りは、イエス様が全精神を傾けられた祈りの決定的一刻であり、ゴルゴタはその必然的帰結であったと思われる。私達は、この記録が高貴な人格に圧倒されるばかりの靈感に刻印された者の告白証言であることをヒシヒシと感じる。

それは、はからずも、この祈りの十数時間後に、十字架上のイエス様を見上げて、大祭司とその輩共の雑言、それは骨を刺す雑言であるが、「あの男、人は救ったが、自分は救えない。救世主(キリスト)、イスラエルの王様じゃないか。今すぐ十字架から下りてくるがよい。そしたら信じてやるのに！」(塚本訳二十七・四二)。

人を救って、自らは救い得ない者とされたキリスト。まさに、イエス様こそ至聖公義の神様が義を貫いて人類を罪から潔めんため、神様の断罪により、呪いの木にかけられ―捨てられて罪人とされた方。それ故にこそ私達はイエス様をキリスト(救い主)我等の罪の贖い主と呼ぶ。イエス様にとって「ゲツセマネは帰還不可能な地点の通過」であった。(バークレー・イエスの生涯2・P六一・新教 大島氏訳)。

註・ゲッセマネの聖書テキストは大体マタイはマルコ資料を踏襲。ルカは別資料をも採用。ヨハネはたぶん既刊の三福音書を承知で簡略。

(二) ユダに思う。

「ユダは一と切れの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった」(ヨハネ福音十三・三〇)。ヨハネは印象深い一句をしるす。

イエス様の手にされた一つの鉢は過越の祝福の鉢ではなかったろうか。過越の祝の同じ鉢からペテロもヨハネも、一と切の食物を受けなかつたらうか。最後の晚餐のはじまるにあたり、ユダも亦イエス様から足を洗って頂いた筈である。それとも福音書記者ヨハネが、「一つの鉢」を詩篇四十一・9の象徴行為と見做したのであろうか。ヨハネ十三・十八から、そうみる可能性はある。恩師を裏切ったユダに対するヨハネの憎しみは烈しい。

独りユダのみ闇の中に消えていった(ルカ二二・3)。そして恩師を敵に売ったユダはやがて、良心の苛責と絶望に、自らの生命を絶った。永久に「裏切り者」の烙印を帯びて。

しかし、イエスを裏切ったのはユダだけではなかった。ペテロもヨハネ自身は裏切らなかつたのか。他の弟子達、そして私達もまた!。ヨハネの知りあいには(前任)大祭司アンナスがいたという(十八・5)。イエス様の弟子ヨハネと福音書の著者ヨハネは

区別して考える必要がある。唯然しボアネルゲ(雷の子)マルコ・三・十七)には著者と共通の気質が見られる(ルカ九・五四)。

イエス様の逮捕処刑後、当然その一味と目された弟子達が、何故サンヘドリン(註)の厳しい追求をまぬかれえたのか。ペテロは大祭司の僕の加害者である(ヨハネ福音十八・十)。

当時のユダヤで男子の「うけい誓」は重い意味を帯びた。私もそこには、何かペテロを弟子団の代表者として、身の安全保障を計る、イエス様への否認の誓約がなされたのではないかと思う。

やがて弟子達は初代教会の使徒として、ペテロはその筆頭として活動した。後にカトリックはペテロを初代ロマ法王として戴く。自殺のユダとペテロと、ここにひろがる天地の差。私自身をもそこに挿んで、それらを瞑想することは、私にとつて、コリント後・七・十のパウロの言葉をもつてしても、尚解答に余る想いである。

註・「サンヘドリン」は大祭司を議長とするエルサレムの宗教最高法院で、祭司、学者、長老、パリサイ人等七十一人で構成された。大祭司とサンヘドリンは中世の法王と法王庁が想像される。

註・「イエスの生涯」、遠藤周作氏・P一八〇の弟子達の裏切り、はあり得たと思う。

(三) ゲッセマネへ！

ゲッセマネの地名は、ガス（搾る）シエマーニーム（油）の由。オリブの搾油場のある畑園のあった地名であろう。「山の上の町」である狭いエルサレムでは、富裕階級者が城壁の外に石垣等で囲ったオリブ畑や菜園をもっていた。あるいはヨハネ・マルコの所有園であったかも知れぬ。（マルコ・十四・十三〜十五。行伝十二・十二〜十五）。E・シュタウファーは「それからイエスは、その家（晩餐の二階坐敷）を離れ、夜の都を通りぬけて、ケデロンの谷に出でいく。弟子達は、エリコへの途上と同じように、またはや怖れながら距離を置いて、彼に従った。たぶん明るい満月の夜、気づかれずにオリブ山に着くように、いくつかの目だたない小さいグループとなり、おそらく違う道を通つてであろう」と。「イエス―その人と歴史」―p一六五・日基団・高柳氏訳。既に夜間は閉ざされていた筈の城門のくぐり戸（針の穴といふ）をどのようにして脱出したであろうか。ゲッセマネはエルサレムの東門を出ると、シロアムの泉から流れるケデロンの谷の小流を渡る。そして左手に城壁をみつ、エルサレムの東北にひろがるオリブ山を北に登つてゆくと、その西斜面にあったという。城壁内の神殿からは七百米位、少し窪地であったという。オリブの林が枝を拡げて茂っていたのであろう。時は過越の祭の前夜である。

エルサレムは世界各地から宮詣の人々でごったがえし、宿にあふれた人々の野宿するテントも今は寝静まった中で、既にサンヘドリンからイエス様に対する逮捕令の出ている状況の中で、彼等にとつて屈強の隠れ場であった。若しもイエス様にして逃れようとなさるなら、そこから僅か数分で山頂に達し、決して捕えられないことのない、洞穴の多い岩山の荒野があり、又ユダヤの独立運動の首領達は屢々そこに退避した。「調べられた二階坐敷」（マルコ十四・十三）にしても、ユダヤでは炊事の水汲みは共同の井戸か泉で陽の傾く頃からの婦人の仕事であった。（創二十四・十一）。夕暮れ時（婦人達の水汲み時刻）に男子が水瓶をもつて街角に立つことは、特異な風景で「しめしあわせ」以外に考えられず、又会場からゲッセマネへの移動も累を及ぼすことへのイエス様の配慮であろう。又当時のユダヤの通念として、同じ鉢の食事を共にして後の裏切りは最下等の卑劣行為とされた。

註 (1) イエス様の最後の晩餐を共観福音書が過越の祝としているが、最近の学者の多くは、ヨハネ福音書の修正的意図を採つて、過越の前夜祭（キドウシ）とする。過越祭と安息日の重なつた（金曜日の夕刻より始まつた）祭のはじまる三時間前に、イエス様は十字架上で絶息し給うた。午後三時はエルサレム神殿の鐘と共に夕の祈禱のはじまる時間であり、この時は贖の羔のほうられる時刻であった。（ヨハネ十八・二八B。十九・十四・三一・

四二)。従つてゲッセマネの夜は、多分紀元三十二年の過越前の木曜日の夜半であろう。

註(2) ユダヤの一日は日没時から始まり翌日の日没時と共に終る。安息日は金曜日の夕刻から土曜日の夕刻迄であつた。従つて今日イエス様の復活を記念する聖日(日曜日)は一まわりのはじめの日である。ユダヤ教の律法では、安息日には医療すら禁じたため(生命にかかわらぬ限り)安息日明けを待ちわびた病人達が、夕暮れ時にイエス様のもとに殺到した(マルコ一・三二)

註(3) ヨハネ福音書の二章のヤコブの井戸のサマリヤ婦人の陽の高い日中の水汲みは、この婦人が同性の人目を避ける特殊な事情に由る。又サマリヤ人を蔑視してユダヤ人は交際せず口をきかなかつた。まして往来で男子が婦人と口を効く習慣のなかつた當時、イエス様の行動は、魂の内側への鋭い洞察と束縛されない愛に由るのである。

(四) ユダヤ教の異端者律法と、神の国の福音

「新しいぶどう酒を古き革袋に入れる」ことはできぬ。イエス様とサンヘドリンとの戦は、その発端からして、ユダヤ教の律法、宗教と、ユダヤ教を母胎としつつも、イエス様による自由の福音(神の国の突入)の衝突であつた。それはイエス様御自身の実存と共に、その宣教(ことば)に革命的な生命を内に秘めていた。イエス様にとって人を縛る宗教法規よりも、霊とまことをもつ

て、人が自由に愛なる神に応答する生活、ユダヤ的観念を破つた隣人への積極的愛が大切であつた。礼拝とは儀式ではなく生活であつた。そして、それができるためには、罪の奴隷となつて死んだ人間性が、新しい創造によつて回復されなければならぬ。罪の敗血症の人間に新しい生命の血が注ぎこまなければならない。

「人、新たに生れずば神の国をみることにあたわず」。人の手になる神殿宗教が如何に栄え「食うによく、目に美しくとも」(創・三・六)旧き律法は人を死に追いやる。人間がそれに堪え得なく腐食されている。それ丈では、新しい自由の生命を内からはぐくむことはできない。

イエス様は律法の頑な拘束から人間の魂の自由を呼び覚まし解放した。具体的には、当時の民族の指導者を自任する宗教の特権階級者共が捨てて省みない苦しむ文盲の兄弟姉妹達に御自身を裂き与えてゆかれた。しかも、それは深い魂のみとりであつて、大衆運動化を峻拒された。冷え切り、餓えた魂に愛の焔を吹きこまれた。九十九匹ではなく失われた愚かさに苦しむ一匹に高貴な生命を賭けられた。

そこに父なる神様の観喜を見られた。そのような此世の秩序を破る愛をもつて、人間を律法に優先させ給うた。安息日は民衆にとつてタブー(宗教的聖禁止事項)であつた。

それ故サンヘドリンの鉄のオキテは安息日の禁を進んで破る異端のラビ・イエス様の生存を許さなかつた。

恐らくイエス様にとって、神殿に崇めこまれた神ではなく、神様はいつもイエス様と共に、又イエス様のいたまう所に神様が在し給うた。

イエス様は神様を御自身の生活の中に体現し給うた。澄んだ鏡であつた。目をひらいて、イエス様を見る者は神様を見る者であつた。このことがサンヘドリンと決定的に衝突した。

彼等の律法観念にてらして、到底生かしておけない、ヤハウエの怖るべき瀆神の言葉を彼等は、イエス様が御自身の權威として口にされるを耳にした。

それは、申命記三二・三九以下、イザヤ四〇以下（殊に四三章）其他詩篇四六・十、五〇・七、八一・十等に由来するエルサレムの神殿祭儀で敢も厳粛なヤハウエの神の自己宣言定式である「私はそれなり」又は「私は彼なり」（アーニイ・フウ）を、或は定式の変形を御自身にあてはめて語られたからである。（マルコ十三・六、ルカ二一・八、ヨハネ八・十二、二四、二八、五八、五九、十・三〇）三八の論争、そしてマルコ・十四・六二等参照）

神様の固有名詞である「ヤハウエ」の名を口にするこすら憚つた彼等が厳粛な神殿祭儀の、あのヤハウエの神、顕現（宣言）定式を人間の分際で自分に適用する者は死すべきであつた。彼等にとつて、聖名を犯す甚しい者であつた。それは神の子、神と栄光を同じくせんとする僭称であつた。

ユダヤ教の異端審問律法は、自ら「メシヤ」を僭称したというだけでは処刑されることはない（ボルンカム・ナザレのイエス・P二一九・新教・善野氏訳）。

しかし、神の榮譽又は留保権を僭称する者、また神殿を辱かしめ、冒瀆する者は死に価した。石打ち刑、又は絞首刑である。

註(1) 「アーニイ・フウ」の神顕現定式については、シユタウファー・「イエスとその人と歴史」一八章の「イエスの自己証言」日基団出・高柳氏訳に詳しい。

註(2) ユダヤ教の異端律法については、同、シユタウファー・エルサレムとローマ・イエス・キリストの時代史 十章・日基団出・荒井氏訳から学ぶ。

(五) 十字架への戦い。福音と律法。

イエス様の死を決定づけたものは、歴史的にはユダヤ教の異端審問律法にてらして、安息日を破り、又そそのかした罪と、この「私はそれなり」定式の宣言をめぐる、サンヘドリンとの鋭い戦であつたと思う。

今、その一例をヨハネ福音書十章と、ことにその後半に著しい一にとつて勉強してみたい。尚、十章は有名な「よき羊飼」の譬であるが、一読して解るように、イエス様が「神共に在す」インマヌエルの強い御自覚と、御自分の行動に於いて神様の御意志

が具現されている―そういう意味の「わたしは、わたしの、」そして、我等の父でなく「わたしの父」に著しい。

そして三〇の「わたしと父とは一つである」の宣言となる。この強い御自覚と確信と御自身を通じて果してゆかれる父の意志、またその使命観が火の如く燃えていられる。対する「ユダヤ人ら」は律法に詳しい、恐らくサンヘドリンのパリサイ人達であろう。

彼等は、イエス様の言葉に「神顕現定式」の冒瀆を鋭く直感して、突差に石を擲む。

しかしイエス様は一步もたじろかない。「父による私のわざを見よ！」真実をみよ、私を審き得る者、石をなげうって審いてみよ、と。

モーゼ律法のコチコチの彼等が、目の前の実体「わざ」を見得ず、神を瀆すⅡ条文にてらしてⅡここに彼等の病根がある。

しかもこの論戦において、イスラエルの指導者を自任する彼等の偽善に対するイエス様の追撃は鋭く徹底的である。

イエス様は彼等の偽善信仰にあえて戦を挑まれた―よき羊飼いの譬全体からみても―のかも知れぬ。論及する所は彼等パリサイ人達を含めて、サンヘドリンの中樞を指向している。

註 私 は 十・三四〜三六の箇所を、二・三の註解を紐解いてみたが、なお充分な納得が得られなかった。偶々シュタウファアの「イエス」の短い節(p 一四〇)から学ぶところが多くあった。

十・三四の「律法に」は(旧約)聖書にの意

恩師と同窓の幼な友達に捧げる。

この一文を 水戸無教会誌を通じて、その昔、新居浜惣開小学校で私たちを、温い真実をもって育んでくださった在天の越智通孝先生に捧げる。

私たちは一学年一学級僅か四十余名の仲間であったが、戦争の渦の中で召された幼な友達、吉田剛君と別府の御老母、高橋不二雄君と御厳父、河端正己君、又御夫君を召されて戦後の重い十字架を負い通された姉妹方。さらに浅見仙作翁の福音の火を受け継がれて、癩兄弟に生涯を捧げていられる、青森松ヶ丘の荒川巖兄に捧げる。比島沖で学徒として海没戦死せし末弟と共に。

満州で迎えた終戦の、あの日を回想しつつ。

一九七四・八・十五

愛の便り

(一) 東海村

I 姉

急にお寒くなって参りました。秋から一とびに真冬がやって来たような感じで、身体の方が気温に感じ難いこの頃でございます。

御無沙汰を重ねておりますが、お元気にお過しのことと存じ上げております。先日は、水無誌をお送り下さいまして有難うございました。お忙しい中での編集発行の御愛老深く感謝致しております。

今年の横川集会を思いおこしながら、宇野兄のものを讀ませて頂きました。これは少しづつ聖書を読み、引用をひきながら日曜日の勉強にさせて頂くつもりでおります。

菊池さんのものは、解り易く出席出来ませんでした横川の集会の勉強をさせて頂けますことは有難く、次を期待しております。服部依子さんの記事も、身近に存じ上げていた事柄だけに意義深く讀ませて頂きました。ほんとうに有難うございました。

話は変わりますが、去る十一月三日の笠松運動公園の身障者のスポーツ大会を観て参りました。健康者のそれと違い、華やかさはありませんが、すべての選手が出場するまでにどんなに努力したことかと、それが偲ばれました。

障害物の競技では、ボールを拾うのに、坐ってしまう人などもあり、日常生活の不自由さを改めて思いました。又関係者の方

も大変なことでしたでしょうね。身内に足の悪い者、目の不自由なものがありますので、感慨深くみて参りました。

晴嵐荘の兄弟達のことですが、N兄は大変よくなり、酸素を吸ってねっていた頃もありましたが、今は、向いのW兄の部屋に来て話されたりしています。W兄は、食べられなくて、体重は減る一方でしたが、今度始めて一キロ増えたとのこと、よくなる兆がみえたようで、喜んでおります。この頃のように寒くては、口にあうものを作って持つてゆけないので、ほっとしております。これから寒くなるばかり、この分では、寒い時期が長いように思われます。どうかくれぐれも、御身体を御気をつけ下さいますよう、お元気であられますようお祈り致しております。

(二) 仙台市

W 姉

晩秋というよりは初冬の感の強い仙台です。今朝はついに初雪がちらつきました。去年より六日早いとの事です。

木の葉も、もうすっかり落ち淋しくなりました。その後みなさまお変わりございませんか。私共もおかげ様で元気に過ごさせていただいております。

水無誌をありがとうございました。それぞれの方のイエス様への愛と、イエス様からいただく恩恵を強く感じました。私達の家庭にも、いつどんな苦難が押し寄せるかも知れませんが、いかなる時も、冷静に受け止めることが出来るようにと祈っております。(後略)

(三) 東京都

S 兄

水戸無教会七三号ありがたく拝受いたしました。熟読してからお礼をと思ってお礼がおくれましたが、未だに読み終ることができずにいます。ただ服部依子さんの貴重な体験を通してのお話は、信仰の目を醒まして下さいました。実験、体験ほど雄弁な証明はないといわれていますが、ほんとうにそうだと思えます。編集の御労苦感謝いたします。また上よりの慰めとお恵みを祈ります。お礼まで

(四) 石岡市

Y 姉

北の国では雪のたよりも聞かれますこの頃、めつきりお寒くなつて参りました。

神様のお守りの中に御平安のことと存じます。先日は、水無誌を御恵送下さいまして、ありがとうございます。毎号宇野兄の「テサロニケ人への手紙」の御講義、そして横川集会での「イエスの受難」を御誌を通して学ばせていただけますことを感謝致しております。また、服部姉の体験記を拝見致しまして、「神様は、思わぬ形で試練を与えられ、それに対し深い計らいをもって恩恵を用意して下さいさる云々」誠に同感でございます。服部姉の御家族の皆様の御平安を心からお祈り致しております。

お陰様で私、術後の経過もよく、去る十月末日退院致しまして、只今は、自宅で静養致しております。体力のないことに加

へ、薬に弱いことなどもありまして、お医者様も心配されましたが、人間の思いを越えた神様の大きなお力をいただいて感謝でございます。

どうぞか寒さの折柄くれぐれも御大切にお過ごし遊ばされますよう。かしこ

『後記』

謹んで第七四号をお届けします。

「イエスの受難」研究は、横川夏期聖書集会でそれぞれ語られたもの。読めば読むほどに人間の愚かさをひしひしと思ひ知らされ、顔を覆いたくなる思いがします。

「愛の便り」編集者への私信というより、水無誌の執筆者、そして読者への公のお便りと受けとめ、あえて掲載させて頂きました。お許しを頂きます。多くの方々から寄せられるお便りが、弱き者にどれ程の慰めと励ましになるかはかり知れません。

激動の一九七四年も余すところわずか、信ずる者には、来る年も、去る年もよき刻々であることを感謝し、皆様の御平安を祈ります。

(半田)

水戸無教会 第七十四号

水戸市緑町三一九一二六

発行人

松本文助

昭和四十九年十二月発行

水戸幼稚園内

編集人

半田梅雄

(実費七十円 二十円)